

# 森有正の生活概念

辻 直人 *Tsuji Naoto*

—— 課題の設定

- 1 —— 渡仏直後の生活感覚と「旅」意識
  - 2 —— 決意としての生活
  - 3 —— 経験と生活
  - 4 —— 生活の普遍化とパリの「透明」化
  - 5 —— 森の教育観
- まとめ

【要旨】本稿は、森有正の思想において「生活」という用語がどのように用いられているのか、森有正の生活概念を検討することを目的とする。森有正にとって、1950年以降亡くなるまでの約26年間パリで生活することが、思索の深まりと変貌を促した。森の言う生活は決意を伴うもの、自覚的に選び取るものであった。決意が出発を促す。出発から経験を深めていく場所として「生活」が捉えられていた。経験の基礎となるのが生活であり、森有正にとって、「生活」は思索の源泉であった。森はパリでそのような経験をしたが、日本から送られてきた雑誌に載っていた庶民の手記に、国籍や文明の違いに関係ない1人の人間としての姿を、日本人庶民にも見出した。森は、自分の仕事に徹することができれば、そこが自分にとってのパリである、とも語っている。経験の成熟と共に、もはや固有の場所としてのパリではなく、象徴的な場所と変わっていった。また、森はパリの生活に秘められた潜在的力を、フランスの学校教育に見出した。

## —— 課題の設定

生活に根ざす教育は、民間教育運動において目指されてきた教育実践の一つである。ベスタロッチの「生活が陶冶する」という教育思想が紹介されて以来、特に新教育を標榜した諸活動は、子どもたちの生活、地域、日常に教材を見出そうとした取り組みを広く展開した。特に生活教育の実践において、生活者としての視点を意識した授業実践の取り組みが目指されてきた。「教育に人間を」という教育者丸木政臣の掲げた目標も、地域で日々の生活に生きる人間へのまなざしと、そうした人間を学ぶことを通して子どもの生活者としての成長を期待して語られたものであった<sup>1)</sup>。また、東北地方で戦前期に広がった北方性教育運動（生活綴方教育運動）では、子どもを取り巻く生活環境のことを「生活台」と呼び（特にここでは、北日本の厳しい自然環境や経済状況に苦しむ特殊な状況を言い含めている）、置かれた環境を克服する力を育てることが目指された。一方、学校教育においても、1989年改訂の学習指導要領より「生活科」が新設され、「生活」を意識する実践がなされるように

なっている。このように、「生活」を教育実践上どう扱うかは、長年の大きな課題であり、重要な概念と言える。

では、生活がどのように人間を育てることを期待するのか。生活の観点から教育を構築するためには、どのような生活観を教育者は持つ必要があるのか。そもそも、「生活」とは何か。今後の教育実践充実のために、上記のような問いを中心に、改めて「生活」と教育の結びつきを考察してみる必要がある。この考察の土台として、本稿では思想家森有正(1911~1976年)の思想を分析し、森の「生活」概念について考察することにしたい。

森有正は1950年の戦後初のフランス政府給付留学生としてパリにわたり、1976年に亡くなるまでの間にパリを拠点として思索を深め、数多くのエッセーをまとめ発表した哲学者である。当時はまだ海外渡航者や長期在留邦人の少ない中で、孤独に思索を深めた稀有な人物と言える。当時のヨーロッパ社会を肌で感じ、日本人として近代や民主主義などの精神を根本的に問う姿勢とその思索内容は、日本における民主教育の在り方を考察する上で、今の時代においても十分に参考になる示唆を含んでいる。

本稿では、渡仏以降に書かれた一連のエッセーにより、森有正の思想の変遷を追うことで、その思想の解明を試みることにする。森自身の経験に根ざしたこれらの文章は大変美しく、読むものを引きつける力がある。森自身「本やノートを堆く重ねた机の前に僕はこれを坐って、書いている。これがすくなくとも意識的には虚偽の証言にならないように、ただそれだけを念じながら、人間が軽薄である限り、何をしても、何を書いても、どんな立派に見える仕事を完成しても、どんなに立派に見える人間になっても、それは虚偽にすぎないのだ。」(『バビロンの流れのほとりにて』1953年10月8日、集成1、9-10頁、傍点は原文のまま。以下同様)と述べているように、どの文章も、一つ一つの言葉が細心の注意を払われながら、誠実に綴られている。一人の思想家の研ぎ澄まされた生々しい感性が、力強く表現されているのである<sup>2)</sup>。

森有正思想の中心概念としては、「経験」が知られており、これまでも多くこの概念をめぐって研究がなされてきた<sup>3)</sup>。しかし、今回は敢えて森の生活概念に着目してみたい。それは、上記に示した初発の関心からであり、「生きる」ことについて多く思索してきた森について、生活(あるいは生活する場)の把握抜きにはその思索を深めることはできなかったと考えられるからである。1970年9月、国際基督教大学で行われた連続講演「人間の生涯」(後に『アブラハムの生涯』という題で1980年に日本基督教団出版局より刊行)の第一回講演冒頭で、旧約聖書創世記の登場人物であるアブラハムの生涯を通して、「私ども自身に一番密接している私ども自身の生活、私ども自身の生涯また私ども自身が自分に持っている経験というものを振り返って見ながら、この話を致して参りたい」と語っている点は注目に値する。ここで森は、自身の思想における重要概念である経験と並んで生活と生涯を列挙しているのである。では、森有正の思想において「生活」とはどのような契機だったのだろうか。以下、エッセーの内容を中心に考察したい。

これまでも、森有正に関する研究や著作は数多く発表されてきた。中でも、久米あつみ

『森有正再読 ことばと思索』（教文館、2012年）や伊藤勝彦『森有正先生と僕 神秘主義哲学への道』（新曜社、2009年）は直接森有正を知る研究者による、その人物像に肉薄した論説となっている。また、二宮正之『私の中のシャルトル』（ちくま文芸文庫、2000年）に所収されているいくつかの森に関する文章も、正に森の最期を看取った人物の一人である二宮しか書けない貴重な出来事が記録されている。あるいは、柘折久美子『森有正先生のこと』（筑摩書房、2003年）も、晩年の森有正の個人的な一面が描かれた珍しい作品となっている。このように直接その人物を知る人たちの考察からも、たびたび追憶と共に考察の対象とされてきた。

その中で、久米あつみも、「森にとってフランス語で書くという営みは、だから全存在を賭けた《冒険》であり生活そのものである」<sup>4)</sup>と指摘している。つまり、森は生活に全存在を賭けて思索し執筆していたというのである。ここからも、生活抜きに森の思想を考察することはできないことが明らかにされている。

ただ、これまでは森有正の思想分析を、「生活」という視点から捉え直す試みはなされてこなかった。森の考える「生活」とは何か考察することは、森有正研究において重要な試みと考える。また、この考察が、教育学における「生活」の扱われ方に一石を投じることになることを期待する。

なお、以下使用するテキストは『森有正エッセー集成』（全5巻、ちくま学芸文庫、1999年）を基本とし、『エッセー集成』からの引用箇所は該当巻と頁を本文中に記載した。

## 1 —— 渡仏直後の生活感覚と「旅」意識

森有正が渡仏して最初に発表した書簡体エッセー集『バビロンの流れのほとりにて』（初版1957年、執筆時期:1953年10月8日から1956年9月3日、以下『バビロン』と略記）では、まだ「生活」という意識よりも「旅」の意識が強かった。

冒頭の1953年10月8日付書簡には「たくさんの問題を背負って僕は旅に立つ。この旅は、本当に、いつ果てるともしれない。」（集成1、11頁）とあり、更に同書所収の最後の書簡でも「僕の旅はまだまだ終わらない。むしろ始まったばかりだ。」（1956年9月3日、集成1、204頁）と書かれているのが象徴的だ。実際、『バビロン』はイタリアやロンドンなど旅先の見聞録が多く収められている。『バビロン』の続編にあたる『流れのほとりにて』（初版1963年、執筆時期:1957年4月16日から1958年5月6日）の巻末で「生活の殆どが東京にいた時と同じかたちになった。」（1958年4月30日、集成1、462頁）と綴られているように、パリ滞在8年ほど経った時点では、パリでの生活が日常として捉えられるようになっていったように見受けられる。

知られている通り、森有正の祖父は薩摩藩留学生として、また在外領事として若い頃に英米生活を経験したことのある初代文部大臣森有礼であり、祖母は岩倉具視の娘で<sup>5)</sup>、上流貴族階級の独特な雰囲気の中で育った。この点本人も自覚しており、「時代後れの貴族的

雰囲気と（中略）当時の一般社会の未だ知らないヨーロッパ的生活とこの二つのものを、僕は恰も普通の人間の生活のように思っていた。（中略）一種の生活力の弱さとヨーロッパの感覚が僕の中に滲みこんでしまったことは事実だ。』（『バビロン』1954年1月5日、集成1、109頁）と語っている。ここで言う「ヨーロッパの雰囲気」とは、祖父以来、当時はまだほとんどの日本人が経験していなかったような欧米生活の雰囲気が森家にはあった、という意味である。

また、38歳で渡仏するまでの森にとって、歩んできた道は「エリート」と呼ばれるにふさわしいものだった。1932年に東京帝国大学文学部仏文科に入学し、大学院進学後は仏文科副手、助手を歴任し、1948年に東京大学助教授の地位を得て、博士号取得を目指してのフランス留学であった<sup>6)</sup>。恐らく、留学から帰国後は教授への昇進が待っていたことだろう。貴族的雰囲気の中で育ち、将来も約束され安定した道を歩んできた者が、フランスに留学しその後居住するようになって、地に足の付いた生活を経験していくことになる。正に、地位や身分を捨て、生活も安定しない状況になることで、自覚的に生活を捉え直していった。旅に出た、という思いは、これまでの道程から新しい一歩を踏み出したことを表す表現だったのではないか。この点は、改めて次節で検討したい。

## 2 —— 決意としての生活

先に見た1954年1月5日付書簡の続きでは、新たに始まったパリでの生活を次のように受け止めている。

今新しい時間が流れはじめた僕の日々は、限りなく多忙になってしまった。朝早くから、食うための翻訳、図書館とソルボンヌでの研究、それから雑多な原稿、それで夜はいつも十二時すぎになってしまう。しかし僕にとって、この生活は限りなく生甲斐があるのだ。僕はこの生活のリズムを固く維持し、数十年を経過したいと思う。青春がすでに過去となった僕に、こういう生活が待っていたことは何というよろこびだろう。もはや僕には、立派な作品を残そうという夢さえもない。それも青春の一つの迷いだったのだ。僕のすべきことは、この生活を護り抜き、生き抜き、そして死ぬことなのだ。」（集成1、113頁）

\*下線は引用者による、以下同様

森は、自らの手で日々の生活をやりくりするために働いた。正式に東大を辞職した後は、翻訳や通訳などの仕事で生計を立てていたと言う。そうした、なりふり構わない日々の中で、どのような生活が充実した生き方なのか模索し、豊かな生活を探し当てた。「この生活は限りなく生甲斐がある」という表現、そしてその生活を「固く維持し」「護り抜き、生き抜き、そして死ぬ」という一生をかけた決意が語られているのである。パリで新しい

生活を始めるにあたって、真に充実した時間を過ごすための決意をしたのだった。1963年に刊行された3冊目のエッセー集『城門のかたわらにて』の中の一節にも、次のようなくだりがある。ここでは、パリと自身の関わり方の変化について考察をしている箇所である。

パリとか自分とかが先ず在るのではなく、この現実の対応が在って、すなわち疑うことのできないある感覚があって、そこから自分とパリとが分出してくる過程である。こういう過程が始まってから、パリの新しい美の発見が始まった。また同時に、新しい自己の経験の定着が始まったように思う。それは生活ということと切り離すことができない、そして生活は勇気であり、決意であると思う。決意だけが生活を生み出す。自分が生きている、という発見は、僕にとって実に巨大な意味をもっている。ここでは発見と確認と決意とが一つである。生活が、偶然と気紛れと他人の弱さへの依存心から独立するということはある一つの対応から生れる、生活に対する、決意を起点とする。生活と仕事という二つのことについて深く反省してみななければならない。今のところ僕は、この二つのものは、一見異った次元にあるように見えながら、実は一つのものだろう、と感じている。

(『城門のかたわらにて』1958年10月10日、集成2、27頁)

ここではっきりと「生活は勇気であり、決意である」と述べている。生活の中で「新しい自己の経験の定着が始まった」と言う。それは「自分が生きている」ことの発見だった。自覚的に生きること、それこそが森の考える「生活」の一側面だったと言えよう。また、そのような生き方は「偶然と気紛れと他人の弱さへの依存心から独立する」ことでもある。惰性に流されたり、人に甘えたりすることを避け、一人の独立した人間として立つことが、生活なのだと考えられている。森がその後の講演等で強調する一人称としての生き方、二人称的人間関係(二項方式)を脱していく生き方を森自身この時点で体得したのではないだろうか。つまり、「社会というものは、一人称の自分以外のものは全部三人称になる」<sup>7)</sup>ことを発見した森は、「二項方式、つまり二人称の方式から絶えず自分が脱出して、一人称、三人称の中に経験を新しくしていかなければいけない」<sup>8)</sup>という結論に達したのである。

であるから、「仕事をするためには、生活に規律をつけなければならない。」(1959年3月17日付日記、集成2、513頁)と考えるようになった。

1962年9月4日の日記にも「人間の生活は、一つの意志から、言い換えるなら、意志に基づく一つのお告げから始まるのだ」(集成3、328頁)とある。生活は意志である。自ら選び取った生活、自覚的に決意した生活、そのような生活を生きようとした。講演録『アブラハムの生涯』で森は「アブラハムは生涯の各瞬間に落ち着いて自分の生活を生きてきたのであります。その間に神の召命が準備されていたのであります」と述べている(33頁)。アブラハムは旧約聖書で神から「わたしの示す地へ行きなさい」(創世記12:1)と呼びかけら

れ、行く先は分からずともその声に従っていった人物である。同講演では、再三「出発」することの重要性が強調されている。「神の召命でアブラハムの最初の出発が行なわれました。これはアブラハムにとって本当の経験が始まる最初の出発でした。私どもは自分の経験を本当に自分で持ってただけでいるだけではだめなので、私ども自身も出発しなければならないのです。」(34頁)あるいは、「一人一人はやはり、二千年の昔と同じように出発しなければならない。」(『砂漠に向かって』1967年8月21日、集成2、451頁)という言葉は、自覚的に(森は「内面的促し」という表現をよく用いる)決意して出発する、一歩踏み出すという意味だろう。つまり、森自身パリでの経験を重ね合わせて語っている言葉ではなからうか。自ら選び取って決意し出発していくことが旅であり、それが自覚的に決意した生活となっていくと考えていたのである。

### 3—— 経験と生活

改めて、森思想の重要概念である「経験」と「生活」の関係について考えてみたい。

森は、「ヨーロッパ、もっと具体的にはフランスにおいて僕は、生活の秩序としての経験というものについて深く反省するようになった」(『ひかりとノートルダム』集成3、31頁)と述べている。つまり、生活を秩序立てるのが経験であると言う。

あるいは、別のエッセーでは以下のように述べている。森はパリで「出発」をすることにより、「自分の経験が本当に自分一己を定義することになった」ことに気付いた。この場合、「経験というのは、芸術とか学問とか、そういう高尚なことだけでなく、その基礎になる生活全体の条件の自覚を意味する」(『砂漠に向かって』集成2、452頁)。つまり、経験の基礎となるのが生活であり、生活全体の条件を自覚することが経験であると言うのである。では、「生活全体の条件」とは何を指しているのだろうか。

上記引用箇所を引き続いて、「更に進んで言うと、生活そのものが他との共生に安んじて委ねておける要素がなくなって来た、ということである。」(集成2、452頁)とも述べている。「生活そのものが他との共生に安んじて委ねておける要素がなくなって来た」とは、先にも見たように、二人称関係から抜け出て一人称として自己を確立していくことを指していると考えられる。こうして、生活自体が出発により自覚的に自己を定義することへとつながることになる。

経験の変貌が重ねられると、「孤独」と名付けるしかない「条件の自覚が現われて来る」。ここも、単独の存在としての一人称を「孤独」と述べているのだろう。何故なら、ここで言う「孤独」は「淋しさとか、仲間外れとか、一人ぼっちとか言うこととは、もとより何の関係もない」と特記しており、「本当の感情と心理とがそこから新しく生まれて来る」状態だからである。森がよく、一人称の世界が「新しく」、二人称(すなわち共依存)の世界では「古いもの」しかない、と語っていることとも符合する。つまり、生活とは孤独になり、出発することで経験が変貌すること、これこそが、「生活全体の条件」というこ

とにならないだろうか。「経験」は森自身の研究対象であるデカルトの思想体系の一領域としても考えられている(集成2、453頁)。このことについて、現代の「実存」の母胎となるデカルトの「経験」論は、森自身自分の考える経験とかなり近いと述べている。そして、「(デカルト) 経験の領域においても、生活の根本条件の自覚という形で、同じようなことが起る」。つまりデカルトにおいても、生活の根本条件を自覚することが経験であるということになる。

経験は変貌する。フランスに渡った時の自分と比べて起きた変貌、「この変化は、自分の行動によってのみ可能になったのだということをも込み込みと感じている。大学の研究室や書斎に凝っとしていたのでは、決して生まれて来なかったであろう。」(集成2、454頁) パリでの生活が、変貌を促したのであった。

そう考えると、『アブラハムの生涯』に出てくる以下のくだりは、納得のいくものがある。

約束は生活の一部にあるのではなくて、生活の全体がその約束によって支えられ、組織され、動議づけられるところまでいかなければそれは本当の約束ではない。初めはある一つの促しのような形として、漠然と現われてきます。けれども、それが出発を促し、更にその目的が生活の全体を組織しなおしてしまう。それが本当の意味のコンヴェンションということです。すべて力強い生活というのはそういうものです。単に宗教的な領域に限らず、本当の私どもの人間的な生活というものは、すべてそうでなければ成り立たないのです。(中略) 一人一人がそういう生涯を送らなければならないのです。

私どもはそういう細かい日常の生活の中で、一つの促しに動かされてある目的を与えられ、それによって自分の生活を組織します。(中略) (親族関係など) を全部断ち切って、本当に自分の中に自分の経験と促しと、そしてその目的と、そのもののために生きてゆく時に、人間は全く一人の新しい人間になる。(中略) 一人一人が本質においてはアブラハムと同じような生活を送ることができるのではないだろうか、と私は考えております<sup>9)</sup>。

ここでは「約束」という言葉を使いながら、人生を決定づけるある方向性によって生活全体が再組織されなければいけないこと、その方向性に向って人間は出発を促されていることを主張した。こうした出発を伴う新しい生活が、人々の経験を変貌させていく。そして人間は新しくなっていく。

現代社会に生きる人々が、生きている環境から全て自由になって自分の決意のままに生きるなど、正直まず無理であろう。見方によっては、このような生き方は今の時代にあって独りよがりの「無責任」と取られもするであろう。だが森は、現代社会のことを「組織化された現代」「組織化、したがって非人間化」と捉えている(集成2、451頁)。組織に縛られ埋没していくことなく、一人の人間として生きようとすることを究極的に守ろうとした

生き方を選び続けたということではないか。

エッセーにおいては、人生において遭遇する大河も砂漠も、森に言わせれば「自分自身だった」とも表現されている（集成2、451頁）。自分がどう目の前の困難を克服するかを問題としている。障壁と思えるものも、それは自分自身の問題だった、ということだろう。

森のエッセーや日記の中には、生活に対する決意について度々綴られている。

1964年9月16日の日記に「何よりも先ず、生活に落ち着きと平静とを確立しなければならぬ」（集成3、376頁）とあり、1964年11月28日付の日記には「本当の意味のフランスでの生活が今から始まるのだ。（中略）何も遅過ぎはしなかったのだ。厳密な、注意深い生活がこれから始まる。真に意識的な生活が。僕の前に残っている限られた時間、これを強烈に生きなければならない。絶えず深く耕し、限りなく実を上げて。」（集成3、382頁）と書かれている。

更に翌29日付にも「僕は今になってやっと生き始めるのだ。生きるためには己れに克たねばならない。このことを決して忘れてはならない。必死になって続けるべきこと、この戦さ、この闘いだけなのだ。肩にのしかかっている責任の凡てを引き受けて生きること、今では凡ての条件が揃っているのだから、よく生きるか否かは一つに僕自身にかかっているのである。絶えず自分に規律を課すことを知らねばならぬ。」（集成3、383頁）と綴られている。

『遙かなノートル・ダム』（1967年刊）所収のエッセー「霧の朝」には、パリらしい冬の気候を迎えることと同時に「人々は仕事と夜の燈火とにその憂鬱を晴らす本当にパリらしい生活が始まる」と綴っている。それは「夏の光にひかれて外に向って激しく開かれていた感覚も静まり、心は内へ向う。途切れていた反省と思索とが、しばらく忘れていたリズムを取りもどしながら、内面を流れはじめる」時間のことを指している（集成3、10頁）。パリでのパリらしい生活とは、こうした内側へ向かう時間を過ごすことを指していると考えられる。

このように、森のパリでの生活は決意と共に始まり、思想としての経験を深めていったのであった。

#### 4——生活の普遍化とパリの「透明」化

ここまでは、森自身の個人としての生活や経験、決意について考察してきた。ここからは、より広い視野で社会における生活について考えてみよう。本節では、『遙かなノートル・ダム』の内容を中心に考察したい。『遙かなノートル・ダム』は思想面においては経験論を大きく展開した点において重要な文献と位置づけられる。また内容面では、それまでのエッセーは個人の内面をえぐるような心理的叙述が多かった一方で、同書は当時の社会情勢、文明論、日本と外国との交渉の問題など、社会的な事柄を多く取り扱っている。森有正の著作における1つの転換点であり、頂点と言っても過言ではない。同書所収のエッセ

ー「ひかりとノートル・ダム」(1966年8月執筆)に出てくる言説から、まずは検討してみることにする。

この中に、日本の近代化の限界について考察した部分がある。ここで森は、日本の近代化におけるヨーロッパ文明の理解が表層的であること、かたや日本人も「日本を外国に理解させる努力が欠けていた」あるいは「理解せるに値するもの(それなしには理解は無意味である)の自己把握さえろくにできていなかった」(集成3、66頁)と指摘している。却って、戦時中の「八紘一字」のような「標語」(表層的な言葉主義)では世界から尊敬を集めることはできないと批判している。そして、「歴史の所産であるヨーロッパ文明を非歴史的に受け取らざるをえなかった日本」(集成3、65頁)にとって、「世界の目に尊敬に値するもの」があるかという問いを掲げ、それに対して森は、「個人個人の生涯の問題」(集成3、66頁)、「我々の生活そのものの責任のある充実」という回答を提示した。日本人一人一人が生活を責任持って充実させる必要がある、と訴えているのである。ただ、実は既に日本人の中に、そのような生き方をしている事例があることに森は気付いた。そのことを示した箇所を、以下引用する。

しかし不思議なことに、生活の場に本当に下ってくると、外国と日本との距離は、本質的には、非常に小さくなってしまふのである。人間のぎりぎりの条件というものは普遍的なものである。日本から来る雑誌など見ていると、農民、小学教員、下層官吏など、生活の苦しい条件に密接している人々の手記が間々あり、それが私を非常に感動させる。またそれが、外国の民衆の生活の条件とどんなに本質的に近かに驚く。しかもそれは正真正銘の日本人の生活なのである。日本の風土、環境、その感情の影を深く刻みこまれた生活なのである。これが充実し、そこに喜びと悲しみが本当に味わわれ、それが一つの決定的な思想的表現をとる時、それはすべての外人に、真剣に生活している外人にすぐ理解されるであろう。否、それより前に日本人自身によって理解され、我々に自覚と誇りと、また新しい問題をあたえるであろう。逆にそれは我々に外国を理解させる鍵ともなるであろう。(「ひかりとノートル・ダム」集成3、67頁)

僕は日本人、ことに生活条件に密接していて、苦しい生活を営む人々の中に、普遍的な人間の生活の典型が現われているのを見た。(集成3、69頁)

森は日本から送られてきた雑誌に載っていた庶民の手記に、彼等の生活を読み取っていた。そして実は、生活そのものは本質的に普遍的であり、外国と日本との距離は非常に小さくなることに気付いた。国籍や文明の違いに関係なく、1人の人間としての姿を、日本人庶民にも見出したのである。ここで森の述べている日本人の手記が何を指しているのかは、正確には分からない。しかし、ここで言われているものは、1960年代に実践された生活記録運動の成果としての手記のこと、あるいは少なくとも生活記録運動の影響を受けた

庶民の投書か記事と考えられる。生活記録運動は東北を中心に青年たちの間で広まった、大人向けの生活綴方運動のことである。戦前から北方性教育運動として知られた北海道や東北地方での生活綴方教育は戦後も山形での『山びこ学校』を初めとして、広く行なわれた。地に足を付けて、課せられた生活条件、時に厳しいこともあったろうが、そうした生活経験から生み出された庶民の声に、森は尊い人々の生き様を見出したのだった。同じ人間としての精神構造、感情などである以上は、育った背景は異なっても共通して理解出来る点があり、生活がもたらす普遍性があることへの気付きと言える。だから、「営々と生活している民衆、そこからすべては出てくるであろうし、また本当の尊敬を世界に払わせるであろう」という結論に達した（集成3、70-71頁）。「正しい、そして深い経験から出て来る言葉は、形容するのがむづかしい一種の重みをもっている。それは、あるものを表現することばの本当の説明は事柄そのものの中に在るからである。」（集成3、25頁）とあるように、言葉の重みの重要性に気付き、それを日本の庶民にも発見したのである。

言葉主義への批判は著作の中で再三繰り返されている。「言葉には、それぞれ、それが本当の言葉となるための不可欠な条件がある。それを充すものは、その条件に対応する経験である。ただ現実にはこの条件を最小限度にも充していない言葉の使用が横行するのである」（『霧の朝』集成3、26頁）とあるように、中身の伴わない言葉の氾濫に森は否定的であった。

この他にも、著書の中で度々日本の言葉主義的傾向が指摘されている。「民主主義（中略）を本当にわからずに、民主主義、民主主義と、何がその中核になっているか、何がその基礎になっているかを理解せず唱えていると、民主、民主と叫んでいるうちに、最後はまた別の形の破局にまで、追い詰められてしまう危険がある」<sup>10</sup>、「民主化、民主主義という言葉は、それ自体では何の意味もないもの、あるいは意味ありげにみえて、意味のないものである。民主という言葉で表現するほかないものがすでに中核に在る事態がそこにあって、はじめてこの言葉はそれを表現するものとして意味をもつのである」（『変貌』、集成4、32頁）といった戦後民主化への危惧を一方で示し、「平和憲法、たしかに結構である。しかしその成立に、体験的要素が余りにも多い（ことに日本の場合）ことを考えると、平和主義に対して一度懐疑的にならないのは、どうしても間違っていると思う」「憲法が戦争を抛棄したから急に平和が大切になるのは全く逆で、法律などあってもなくても、平和が大切なのであり、敗戦があったろうがなかったろうが、平和は大切なのである」（『霧の朝』、集成3、28頁）という具合に平和憲法でさえも懐疑的になる必要を覚えた。何故なら森にとって、日本から来る雑誌類を見ていると「経験の重みを荷なつた発言がほとんどない」。戦後日本で見られる言説の多くは体験主義的で表面的であることへの強烈な批判である。

一方で森にとっても、パリでの生活は完全に「生活」として根付き、新たな心境へと向かうようになっていった。「霧の朝」に以下のような記述がある。

自分の中に、経験の二重の層が出来、一つは自分を取り巻くフランスの社会で形成さ

れるもの、もう一つは、その深部に、或いは、その底部に、深層心理と呼べば呼べそうな一種の夢の世界のようなものが形成され、それが遠距離にある日本の社会の変化に実に鋭敏な感覚をもって呼応しながら、連なっている(中略)外国で形成されはじめた経験の層も、それが生きた層である以上は、年月が経つにつれて、それ自体深まり、自分の深部に根を揚げはじめる。それが自分の夢の層に喰い込みはじめる。

(「霧の朝」集成3、11頁)

フランスの生活が日常となって、心に一定の層を形成し始める。フランス生活が日常になったこと、そしてそうした心の中で2つの文明が対話できる状態になって初めて「僕は、そういう心の構造の中に、自分にとって、自分の国と外国とが交渉する、本当の唯一つの実在する場所を確認した」(「霧の朝」集成3、12頁)のであった。実際に五感を通じて現地の生活に触れて感じ取る。こうして知り得た情報は、単に表面的に得た知識だけでは分からない深さがある。本来なら、そうした現地の人々と同様の生活をする事で初めて自国文化との交流が始まる。これこそが経験であり、経験の深まり(変貌)ということであろう。しかし、現実には表面的理解で終わらせていることも多い。森はこのような事態を「体験」と呼び、「経験」と区別しているのである。つまり、経験を生み出す生活こそが、森の目指した生活ということに外ならない。パリは、そうした感覚を開かせてくれた場所であった。

だからパリでは、伝統が生活の<sup>かまち</sup>枠とはならず、発酵剤のようにになっているのである。(中略)心あるフランス人はパリのこういう性格を心得、それを各々の仕事の土台にしているように思われる。それが伝統の促しに発するものであるが故に、その経験の成果は伝統そのものをさらに豊かにし、それに生命を賦与する役目を果たしているのである。

(「霧の朝」集成3、20頁)

住み続けることによって、感覚の覚醒を経験したパリが日常になっていく。パリについて、1972年初版の『木々は光を浴びて』所収の連作「パリ」の中で、森は次のように語っている。

パリは、いかに美しくとも、変化に富んでいようと、表面に過ぎない。一步扉をおして中に入ると、そこにはもうパリなぞを超えた人間の「生活」がある。(中略)生活そのものが、これほど外面の美しさの下にかくされて存在している町も珍しいであろう。(中略)そして私は自分の生活に還って行く。

(「パリの冬とその街」集成5、256-257頁)

もはやパリという特別な場所ではない。そこで生きている人々の生活がある。自分も自

らの生活に還って行く。「霧の朝」で「心が内に向かう」という箇所と呼応する内容であろう。栃折久美子は、森の言葉として次のように記録している。

ヨーロッパは一度来てしっかり見ていけば、何度も来る必要はありません。(中略) また来たいと思ったら、アルバムなどをひっくり返していないで、自分の部屋を片付けて仕事をすることですよ。そうすれば知らずにパリにいることになります<sup>11)</sup>。

自分の仕事に徹することができれば、そこが自分にとってのパリである、と言うのである。もはや固有の場所としてのパリではなく、パリという地名が1つの象徴として用いられていることが分かる。森にとっては、パリは「透明」になっていて、自分自身になっていく場所に過ぎないことになる。『バビロン』の冒頭で、森は既にこうした本質へのまなざしを言い表していた。同書で彼は、運命や死、人の生涯を振り返って見た時に、戦争で亡くなった若い魂が「透きとおって、裸の自然がそこに、そのまま、表われている」ことを感じ取っていた(集成1、8頁)。本質が物事を通して見えてくる、森はパリの生活を通して、生きることの本質を見出したのだろう。

森によれば、経験は成熟すればするほど「他の経験に対して自分が透明になってくる」ものであり、「また他の経験もこちらに対してだんだんと透明になってくる」ものと捉えている(『アブラハムの生涯』19-20頁)。経験は成熟することによって、もはや自分だけの経験ではなく、他者の経験とも共通するものになっていく。パリでの生活が森にとって決して自分のみの固有な経験ではなくなり、人間普遍の生活として成熟していったのである。

## 5 — 森の教育観

最後に、森有正は教育をどう考えていたのか検討したい。というのも、生活をめぐる論理構造と森の教育観がどうつながっているのかを明らかにすることは、本稿の目的の1つである教育における「生活」の位置付けを検討する上で必要だからである。

森の著作の中では、たびたびフランスの教育について言及がされている。「霧の朝」の中で「フランスの教育からは実に教えられることが多いと思っている。僕の経験と思索の中には、いつもフランスの教育が影をおとしている」とまで言い切っており、以下のようにフランス教育のことを紹介している(集成3、20-21頁)。

森が言うには、フランスの教育の特徴は「知識の組織的集積と発想機構の整備」の二つに絞ることができる。知識の集積とは記憶に関する部分である。膨大な量の知識を記憶し集積しなければならない。歴史の場合、本文2000頁はあるという教科書を覚えなければならない。こういって、フランス教育はいわゆる暗記つめ込み教育と想像されてしまいがちだが、そうではなく、あらゆる教科においてこうした記憶を求められる内容が「作文によって生徒自身の表現能力との関連において記憶されるようになっている」と言う。つま

り、自らの言葉で記憶した知識を表現する、「記憶が単に受動的な機能ではなく、発想機構と密接に結びついた積極的機能であることが前提とされている」。「その眼目は読み理解することよりも書くことに集中される」。あらゆる教科で作文が最後の締めくくりとなり、「文科系では最高学年に哲学が課せられ、思考の訓練が行われる」「教育の中心課題が知識の組織的蓄積とそこから自己の発想を行なうという眼目に置かれている」と、身に着けた知識を自ら表現できることが最終的に目指されていることを指摘している。

森自身は「つめ込み主義の教育が誤りであることは明らかである。しかし自分が本当に思索しうるためには龐大な、正しく吸収された知識（ということは、いつでも正確に言葉や文章にして発表しうる知識）を持つことが必要であることは同様に明らか」（『霧の朝』、集成3、23頁）と述べた上で、次のように教育論を締めくくっている。

自己の経験がそのことばや観念の定義を構成するに到る時、われわれは初めて意味のある発言をすることが出来るのであり、その発言は同時に行為の形をもとりうるものである。こういう人間についての基本的なことがらがその教育の根底にある。

(集成3、24頁)

言葉そのものが借り物でなく、自分自身に根ざした言葉であることで、初めて意味のある発言ができる。そのような基本的ことがらが教育の根底にある、と指摘している。これは、前節で考察した日本の言葉主義への批判に通じる。

更にフランスの教育について、「自国語教育の原理、本を読んで理解する、という受動的なものではなく、学んだ形式にしたがって自己を表現することを学ぶその原理は、他のすべての学科にも、それぞれの条件によって多少の変化を伴いつつ適用される」（『滞日雑感』集成3、229頁）と伝えている。つまりフランス教育は自己を表現することを学ぶことである。こうした教育は「フランス人の生活態度全体の中から出てくるもの」（同上）である。ルソーの執筆した教育論『エミール』（1762年刊）でも、「子どものころに考える習慣をつけておかないと、その後一生のあいだ考える能力を奪われることになる」<sup>12)</sup>から、幼少期は徹底して自分の感覚から学ぶようにさせるよう強調している<sup>13)</sup>。その上で他者との共存、道徳性を学ぶことを提唱している。自己の感覚と表現を育てる教育は、『エミール』以降形成された伝統と言えらる。別の著作からも引用しておく。

フランスの教育は、一言でいえば、若いフランス人に、思考、判断、表現の能力を獲得させることを大きい目的としている。（中略）単に知識を蓄えることではなく、その知識を自分の判断で整理し批判し、本当に自分の知識とすること、デカルト以来の思想的伝統、これがまたフランスの教育の真髄でもある。自分の知識が本当に自分のものであることは、それが完全に表現出来ることによって立証される。教育面においては、それは徹底した作文の実践によって代表される。知識の理解は、読書によって学

んだものを正確に摘要することによって、これまた作文を通じて実現される。

(「パリの学校」 集成 5、271 頁)

作文教育については、注釈がある。フランスで実施されている作文教育は、既に紹介している日本の生活綴方教育とは異なる、という点である。日本の生活綴方は、常に一人称が主語になっている。つまり「私」が生活で経験したこと、感じたり気付いたり考えたり、あるいは調べたりしたことを、一人称で語るよう指導されている。一方フランスの作文教育と言われているものは、いわゆる論説文であり、客観的論理的な展開が求められる。バカロレア（大学入学資格試験）でも、所要時間 4 時間にも及ぶ哲学に関する論述試験が課せられる。つまり日本の綴方は文学的文章であり、フランスの作文は論文である。だから、森のこのような自己表現をさせるという評価は果たして当たっているのかどうか。ただし、新教育運動の 1 つとされる南仏ニースのフレネ学校では、作文や詩による文集を作り、絵画製作にも力を入れており、いわば自己表現を大事にした教育と言える。この点については改めてフランス教育の実情と照らし合わせて、森の述べているところの妥当性を検討する必要がある。いずれにせよ、フランスにおいては作文が教育において重視されているのは確かであり、学びの成果を生徒自らの言葉で表現させる機会があることは、森にとって強い印象を与えたのだろう。

もう 1 カ所、森のフランス教育に対する見解で、特にしつけについて、次のように述べている箇所がある。

(フランスの) 子どものしつけの根本になるのはなんであるかと言うと、子どもが二人称関係に陥ることを防ぐ、それがしつけの根本にある。日本語で言うと「甘える」と言うか、そういうことを根本的に防ぐ<sup>14)</sup>。

つまり、一人称として育つように、二人称関係に陥らないようにするのがフランスのしつけだと言うのである。これは、あくまでも全体的特徴として語っているので、必ずしも一概には言えない話であろう。ただ、これまで見てきたような森の主張からすれば、人は自己である一人称となって人生のある時点で出発する必要がある。フランスは教育において自己を育てているのであり、その手法として作文が用いられている、ということになる。こうした自己を徹底して育てる教育があるからこそ、パリのような思索を深める街を形成し、そこに住む者の生活を支えているということだろう。

## —— まとめ

以上、森有正の生活概念について検討してきた。考察内容をまとめてみたい。

森有正にとって、生活は思索の源泉であったと言えよう。出発から経験を深めていく場

所として「生活」が捉えられていた。森の言う生活は決意を伴うもの、自覚的に選び取るものであった。決意こそが出発を促す。

最晩年の作品である「遠ざかるノートル・ダム」は1974年、亡くなる2年前に書かれたエッセーである。その中で、「唯一、確かなことがある。それは、ノートル・ダムの傍らに在った四半世紀のパリ生活が私を決定的に内面へと向わせたことである。同時にそれは私を表現へと向わせるものでもある。」(集成3、306頁)と書き残している。パリでの生活が内面へと向わせ、表現へと向わせた。パリでの生活によって森の経験は深まり変貌を遂げた。その過程で、絶えず自己を定義するようになっていった。

一方で、没後発表された晩年の手記「マロニエの黄ばむ頃」で森は海外での生活に触れているのだが、「私自身、自分は『生活している』と言えるかどうか甚だ疑問である」と自問している<sup>15)</sup>。「本当の生活」を目指している森にとって、言葉の問題等から来る海外生活の困難さ、あるいは思索を深める上での限界を感じていたようにも読める。

では、究極的に、森は何を目指して生きるのだろうか。森の目指したものの、それは生き様でそれぞれ与えられた「進むべき道」に向かって歩みを始めることなのか。『アブラハムの生涯』の中で森は、「一つの促しに動かされてある目的を与えられ、それによって自分の生活を組織します。」(76頁)と述べていた。あるいは、本文でも引用したように「約束」という表現も用いられている。人間は内からの促し、ある決意に支えられて、一人一人「ある目的」ないしは「約束」を与えられ、それに向かって歩んでいく。生活はその目的に合わせて再組織されなければならない。ただ生きているのでなく自覚的に生きようとする事、そのような生き方をするのが、森の言う「生活」だったと言える。

では、森の目指す「生活」は生活教育において、どのような意義を与えうるだろうか。フランス教育に対する見解で見たように、また森が感銘を覚えた日本の庶民たちによる生活記録からも分かるように、生活に生きている自己を見つめ語ることが、何より大事にされなければならない。生活とは自己(一人称)になって出発することであるとすれば、もはや国籍や文明は関係なく、自己の確立と発信を土台とした教育を目指すことが、森思想に根ざした生活教育ということになるだろう。

今後の課題としては、教育史的課題としては、実際に日本の生活教育が何を目指してきたのかという点を、教育実践から読み解く必要がある。森有正研究としては、生きる場所としての「生活」において経験を積む「人間」という存在について、あるいは森の考える「時間」について更に検討を続ける必要があるだろう。というのも森は一人称の人間の確立を目指していたことが今回明らかになったのだが、人間存在そのものやナショナリティの問題をどう捉えていたのか、更に丁寧に考察する必要がある。また、経験の深まりには時間軸がどうしても必要である。一存在が時間軸に沿って経験を深め歩んでいく、と言う時に、過去や時間をどう捉えるのかという点についても、更なる考察を要するだろう。

## 《注》

- 1) 丸木政臣『教育に人間を』民衆社、1977年
- 2) 一方で、二宮正之によれば森は「ぼくは自分のことなど一度も書いたことはありません」とも述べていた。二宮は、この森の言及をどう解釈するのか相当時間がかかったと言う。そして「これらの著作に自伝的色彩がきわめて濃いのは事実であるが、エッセーの語り手である『僕』は、著者の反省的視点をくぐって生まれた『人物』としての性格をも持つ」、すなわち「創意が働いている」と結論付けている（二宮正之「解説」集成1、563頁）。
- 3) ロベール・ロラン「森有正とフランス思想 『経験』と『体験』の区別をめぐって」『哲学年誌』(44)、2012年。安部貴洋「森有正の経験論 『日本的な経験』と戦後経験主義教育」『教育思想』(36)、2009年。釘宮明美「森有正の『経験』思想 存在論的証明の理解の変遷」『宗教研究』80(4)、2007年など、森有正の経験論を主題とした論文は多数ある。
- 4) 久米あつみ『森有正再読 ことばと思索』教文館、2012年、16頁
- 5) 関屋綾子『一本の樫の木 淀橋の家の人々』日本基督教団出版局、1981年
- 6) 森有正の履歴に関しては、森有正『遙かなノートル・ダム』（講談社文芸文庫、2012年）巻末の年譜を参照した。また、東京帝国大学研究室の頃の様子については、中村真一郎「仏文研究室の森さん」（『森有正をめぐるノート』1、森有正全集第一回配本（第一巻）付録）に貴重な回想が残されている。
- 7) 森有正『古いものと新しいもの』日本基督教団出版局、1975年、141頁
- 8) 森前掲書、149頁
- 9) 森有正『アブラハムの生涯』日本基督教団出版局、1980年、76-77頁
- 10) 森有正『いかに生きるか』講談社現代新書、1976年、18頁
- 11) 栃折久美子『森有正先生のこと』筑摩書房、2003年、30頁
- 12) ルソー（今野一雄訳）『エミール』（上）、岩波文庫、2007年、241頁
- 13) ルソー前掲書、96頁
- 14) 森前掲書、150頁
- 15) 森有正「マロニエの黄ばむ頃」『森有正全集』第12巻、1979年、309頁